

福井県産養殖イワガキ生産研究

福井県水産試験場 栽培漁業センター
原 誠二

1. イワガキ養殖を推進する背景

2024年3月に北陸新幹線が敦賀駅まで延伸し、福井県への誘客が期待されている。一方で、県内の水産物には冬を旬とするものが多く、延伸直後の春～夏に提供できるものが少ない特徴がある。そこで県は、マガキとは異なり春～夏が旬であるイワガキ（英名：Rock Oyster）に着目してブランド化を進めており、2024年（令和6年）6月6日には新ブランド魚として発表する予定である。しかし、天然イワガキの漁獲量は近年減少傾向にあり、成長速度も遅いことから、資源量の低下が懸念されている。そのため福井県水産試験場では、イワガキ養殖の普及拡大を目的として、種苗生産技術の開発や養殖試験および貝毒検査に取り組んでいる。

2. 福井県産イワガキ種苗の生産

水産試験場にて、2019年からイワガキの種苗生産を開始した。種苗生産の工程は以下の通りである。産卵時期である夏期に、福井県産の親貝から得た卵と精子を用いて受精させ、浮遊幼生を飼育し、採苗器（ホタテ殻もしくは樹脂製採苗器）に付着させ、20mm以上のサイズまで稚貝を育てる。二枚貝の中でもイワガキは種苗生産が難しいとされていることもあり、年によって生産数は異なるが、数万個体規模の種苗を生産する技術を習得することができた。

3. 養殖場としての適性試験

イワガキ養殖は人の手で餌を与えずに海中のプランクトンを餌とする無給餌養殖が特徴であり、コストが少ない利点がある一方、成長速度は環境によって左右される。2019年に生産した種苗を2020年4月から嶺南地域の9海域に垂下し、一般的な養殖年数である3年後の6月に殻高（図1）や重量の測定を行った。その結果、海域毎の平均殻高は100～120mmとなり、7海域で平均殻付き重量が200g以上となった。また、身入り（軟体部重量／殻付き重量）は14～19%であった。よって、京都府などの先進県と同様の成長速度であると示され、福井県内での養殖が十分に可能であると見込まれた。



図1. 約3年養殖したイワガキ

4. 出荷時の検査体制整備

二枚貝類の出荷に際しては農林水産省が策定した「二枚貝等の貝毒リスク管理におけるガイドライン」により、都道府県が貝毒の監視を行うよう定められている。水産試験場では出荷時期における貝毒のスクリーニングとしてELISA法による簡易検査を行っている。2022年から麻痹性貝毒検査を開始し、2024年からは併せて下痢性貝毒検査も実施している。現在までに、出荷規制値に近い毒量は検出されていない。

以上のように水産試験場では、養殖に適した海域であると示された福井県内において、養殖の基となる種苗の生産から出荷時の検査に至るまで寄与することで、イワガキ養殖の普及拡大を図っている。現在、養殖年数を短縮して生産性を向上させるために、早期採卵技術や高成長化種苗を開発中である。今後は、漁業者からの要望に応じてより多くの種苗を量産できる体制の構築を目指す。